

# 年に1度の大祭、 グループーニマでグレーに感謝の祈りを捧げました！



グレーのスワミ・サッチャナンダ師の写真を飾った祭壇にはアドベンチャー農園で取れた野菜やメンバー手づくりのオーガニック料理をお供えしました。お花は中込さん作。

グルーのスワミ・サッチャナンダ師の写真を飾った祭壇にはアドベンチャー農園で取れた野菜やメンバー手づくりのオーガニック料理をお供えしました。お花は中込さん作。

7月21日(日)に、吉浜の紗侑良花においてグループーニマが開かれました。グループーニマは、インドの大祭の一つで、グレーに感謝を捧げるものです。レギュラーメンバーのほぼ全員が集い、まさみさんを導師として、グレーのスワミ・サッチャナンダ師に感謝の祈りを捧げました。まさみさんのご講話をいただいた後に、キルタンがスタート。パワーアップしたキルタン隊と、ギター、フルートなど楽器を加えたサッチャンキルタンバンドがかかるがわる12曲を演奏。個性あふれるリーダーの歌声に導かれ、思い思いにリズムを取り、時には踊つたりして、大いに盛り上がりました。

その後、キルタンが続く中で、プラサードをいただきつつ、まさみさんに感謝を伝え、お手紙を渡したり、近況報告をしました。プラサードはもちろん、完全オーガニック。メンバーの料理の腕前も年々磨かれ、とてもおいしくいただきました。

クライマックスは、満月のチャンティング。サッチャナンダ・ガヤトリという特別なマントラを、「愛と感謝を捧ぐ わが人生の師道を照らし 輝きの世界へとお導き下さい」と記した紙とまさみさんの写真の上にお花やお米をささげながら108回唱えます。このまさみさんの写真がガイドとなつて、グレーのスワミ・サッチャナンダ師へ祈りを届けてくださいました。最後はアーラティを祈りを込めて唱和し、グループーニマを締めくくりました。愛と感謝の気持ちにあふれる一日を紗侑良花でグレーとともにすごし、平和で清々しいエネルギーをいただきました。



参加者全員へのまさみさんから、サッチャンキルタンバンドのオリジナルTシャツのプレゼントが。バンド名をつけてくださったスワミ・サッチャダルマ師が、来日される9月にみんなで着て、お出迎えしましょう。



パワーアップしたサッチャンキルタンバンド。ギターとフルートが加わり、リズム隊のメンバーも増強。練習の成果もあって、すべてのパートが美しくハーモナイズしていました。



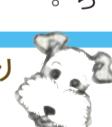
プラサードをいただきつつまさみさんに近況報告。子供たちとも和やかにお話されていました。



クライマックスは「祈りの扉を開く」という「アーラティ」。みんなでアーラティを唱えながらろうそくと鈴の音を捧げます。



アドベンチャー農園だより



<ニンニク泥棒と猿>

7月の中旬、大事に育てたニンニク70個全てが盗まれるという事件が起きました。皆ショックで驚き、怒りに震えました。一体誰がこんなことを！しかし、まさみさんが直後の畑をご覧になって「こんな状態では盗まれても仕方がない」と一喝。草は伸び放題で隣との境もわからないほど。沿道も草が飛び出し、荒れ放題。「もうやめてしまったのかと思うくらいのひどい状態」と言わされました。皆で反省して、一生懸命草を刈り、写真のようにきれいにしました。8月は週2回体制で維持していきます。ところが、きれいにした途端、今度は猿がやってきてサツマイモを殆ど食べつくしてしまいました。これには参りました。トマトやなす、キュウリはまだ被害が少ないものの、対策として周りにテグスを張り巡らせましたが、効果のほどはわかりません。吉浜地域全体で猿に悩まされているそうです。困ったものです。しかし、皆で協力して引き続き畑をきれいにして、人の気配がいつもあるようにしていくしかありません。皆さんも畑に来て応援してください！

# さゆらばな つうしん Vol.11

発行日：2013年8月1日  
編集：安田さん  
写真：ゆみこさん  
アドベンチャー農園だより：ひらたくん  
デザイン：ゆかり  
発行：Shanti Path



「あつ流れ星！」「こつちからも！」「あつちも！」ガンジス河のほとりから見上げる空は広く、星が飛行物体のように動いている。河にこぼれ落ちそうなほど煌めいている。まるでアトラクションが始ま前のワクワクするレーザー光線のショーのようだ。行き交う流れ星に見えたのは何と、水辺のホタルだ。「すごい、ホタルの大群！？」と思って見ると、それは、願い事を思い浮かべる心の動きより早い流れ星。何億光年の彼方に輝く流れ星と優雅な光を放つて飛ぶホタルとの区別がつかない。しかも、ヒマラヤのガングートリの氷河が融けて生まれた神の河、ガンジスのほとりで。圧倒された。人の手が入らない大自然は、こんなにも神聖な美しさを見せる。

今年の夏は、宮古島に滞在していた。七夕の夜、吉野海岸にいた。細かい星形の砂を一握り空へ向かって思いっきり撒らした様な満点の星空。花嫁が被るシルクシフォンのベールを思わせる天河。彦星と織姫はどんな風にしてこの星の川を渡り、年に一度の逢瀬を叶えるのだろう…。海が光る。星を映して光っているようだ。けれど、星は動かず静かに光を放っているのに、海中の光はコンピュータでプログラミングされたイルミネーションの様に次々とランダムに光る。夜行虫だ。ここにも、大自然の神々の存在の確かさを見る。

人間の想像力の限界を超えた、人間をはるかに超えた美しさと調和を、人間のエゴで決して浅はかに破壊してはならない。この美しさに触れてこそ、「美しく生きる」ことの大切さをからだと心が感じるのだから。

